



世界現代詩文庫

16

土曜美術社

現代ドイツ詩集

湖のほとり

木木の下に小さな家が一軒

屋根から煙があがっている

もしも煙がなかったら

家も木木も、そして湖も

なんとつまらないものだったろう。

世界現代詩文庫／16／現代ドイツ詩集

編・訳者——鈴木 俊

装 幀——蔦本咲子

発行者——笛木利忠

発行所——土曜美術社

東京都新宿区市谷加賀町二—二—四

〒一六二 電話 〇三（二三五）六七二六 振替 東京七—九九二九二

発行一九九〇年四月一〇日

定価一〇三〇円（本体一〇〇〇円）

ISBN 4—88625—211—7 C0198

世界現代詩文庫 ⑬

現代ドイツ詩集 書章

編・訳 鈴木俊／監修 小島十三郎



土曜美術社

世界現代詩文庫

⑬

現代ドイツ詩集

目次

ベルトルト・ブレヒト

おお、お前が吊り下げるフアラダーよ! ・ 12

子供殺しの女、マリー・フアールについて ・ 13

マリーAの思い出 ・ 16

いぶきの儀式 ・ 17

哀れなB・Bについて ・ 21

詩人の移住 ・ 23

読書する労働者の問い ・ 23

文学は研究し尽されるだろう マルチン・アンデルセン・ネク

々のために ・ 25

亡命途上の老子道德経成立の由来 ・ 26

抒情詩にとってよくない時代 ・ 29

ウルムの仕立屋 ・ 30

桜んぼ泥棒 ・ 30

庭の水まきについて ・ 31

タイヤ交換 ・ 31

解決 ・ 31

いやな朝 ・ 32

煙 ・ 32

わたしに墓石はいらない ・ 33

エーリッヒ・ケストナー

君知るや、大砲の花咲く国を ・ 33

天才室内音楽家の夜の歌 ・ 34

郊外の通り道 ・ 35

日曜の朝の小都市 ・ 36

人類の進化 ・ 37

ローレライの上でのさか立ち ・ 38

クルト・シュミット、バラードのかわりに ・ 40

ヨアヒム・リンゲルナッツ

嗅ぎ煙草入れ ・ 42

膝曲げ ・ 42

懸垂あがり ・ 43

さかあがり ・ 44

ブーメラン ・ 45

水泳に寄せて(兄弟たち) ・45

また借り娘のおしやべり ・46

シェリング通りでの用足しきなかのおしやべり ・47

夜の怒り(または夜鳴き鳥) ・48

港の居酒屋 ・49

はるかな墓 ・50

船乗りクッテル・ダッデルドウのクリスマス ・51

ネリー・ザックス

君達 傍観者たち ・53

救われた者たちの合唱 ・54

追われる者が追う者にならないように ・55

茨の冠をかぶせられて ヒエロニムス・ボッシュ ・58

墓碑銘 B・NとJ・Mのために ・59

ペーター・フーヘル

ウエンドの荒野 ・61

哀歌 ・62

街路 ・63

冬の歌 ハンス・マイヤーのために ・63

薊の根の下に ・64

オリーブの木と牧場 ・65

出会い ・65

トスカーナの人 ・66

オデッセーの墓 ・67

マリイ・ルイーゼ・カシヨニッツ

ブライスガウの秋 ・68

蘇生 ・70

希望のしるし ・71

ヒロシヤ ・71

ただ辛抱するなら ・72

シシリイ島からの葉書 ・72

ゲナツアーノ ・74

語られなかった ・74

わたしの国 ・75

ゴミ捨て ・ 75

エリカ・ミテラー

無題 ・ 76

旅人たちの歌 ・ 77

ドイツ女性の悲しみ（一九三四年） ・ 78

ノックのサイン ・ 81

老爺の肖像 ・ 81

ギンター・アイヒ

オーロラ ・ 82

へんびな農場 ・ 83

棚卸し ・ 83

仮設トイレ ・ 85

ゴミ捨て場 ・ 85

配慮されている ・ 86

おこなわれなかった会話 ベーター・フーヘルのために ・ 86

未来の夢 ・ 87

ローマのための脚注 ・ 88

レンズ ・ 88

人間が人間の敵であることについて考えよう ・ 89

シュテファン・ヘルムリー

詩人の死 ヨハネス・ベッヒャーの思い出に ・ 90

ぼくらの時代のバラード 世界の諸都市への呼びかけとともに

・ 92

渡り鳥と実験 ・ 95

カール・クローロウ

ポプラの葉 ・ 96

一九五〇年のオード ・ 97

言葉 ・ 98

午後 ・ 99

雨の降る前 ・ 100

わたしにとつての風景 ・ 101

平和に ・ 103

自己確認 ・ 105

昔の風景 ・ 105

エーリッヒ・フリート

さまざまな理由 ・ 106

イメージ ・ 107

一九六六年五月一七日から二二日にかけて ・ 108

過ぎてしまえば ・ 108

模範について考える際に ・ 109

書式 ・ 109

死者たち、その生きた姿 ・ 110

一つの風景描写 ・ 111

田舎ふうにな ・ 112

木々についての会話 K・Wのため ・ 112

新自然詩 ・ 113

心の自由について ・ 114

利己的でない教育 ・ 115

新しいタイプの平和の願い ・ 115

ハインツ・ヴィンフリート・ザバイス

ヒロシマの歌 最初の原爆投下後に ・ 117

エッケ・ホモ（受難のキリスト） ・ 118

自己あるいはユキノシタ（一つの記録） ・ 119

ハインツ・ピオンテク

秋の牧場 ・ 122

夜が来れば ・ 123

秋——ボーデン湖から ・ 123

たえない詩 ・ 124

冬の謎 ・ 125

ハイゼンベルクの生徒達へ ・ 126

六八年の中からの単純な文章 ・ 126

禁句 ・ 128

ヨハネス・ポプロウスキー

地平 ・ 130

ニワトロの花 • 130

アッシュアヘンブルクのブレンターノ • 131

チュービンゲンのヘルダーリン • 132

いつでも呼びかけるために • 132

東方 • 133

夜の歌 • 134

パウ・ツェラーノ

骨壺からの砂 • 135

ロロナ • 136

死のフーガ • 136

波 • 138

二人で • 139

替えた鍵で • 139

言葉の格子 • 140

讃歌 • 141

インゲボルク・ハッハマン

大きな積み荷 • 142

猶予期間 • 142

日日 • 143

薔薇の雷雨に • 144

大熊座への呼びかけ • 144

霧の地方 • 145

流れ • 146

ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガー

詩を読まない人のための詩 • 147

上級生用の教科書に • 148

すべての電話加入者へ • 148

消えた人たち ネリー・ザックスのために • 150

歴史的プロセス • 150

文学かどうかの質問に対する最近の寄稿 • 151

二つのあやまち • 153

ベアト・フレヒヒュール

村 ・ 154

詩人紹介 ・ 159

訳者あとがき ・ 172

詩
篇

ベルトルト・プレヒト

おお、お前が吊り下げるフアラダーよ！

おれは自分が弱いのに自分の荷車を引いた

おれはフランクフルト通りまでやってきた。

そこでまだ考える。

やれやれ、この弱虫！ このまま行ったらぶっ倒れてし

まうかもしれない。

十分後にはおれの骨だけが町の路上に横たわっているに

過ぎなかった。

その時つまりおれがくずおれそうになると

(御者は電話に走った)

飢えた人間達がもう家から飛び出してきて

一ポンドの肉にありつこうと

包丁で骨からおれの肉を切り裂いた。

おれはそれでもまだ生きていたし、まったく死ぬ用意なぞできていなかった。

しかし奴らをおれは前から知っていた、あいつらを！

彼らはおれに蠅よけの袋を持ってきたし、それどころか、

古いパンをご馳走してくれ、

おれの御者に手荒にしないよう注意しました。

かつてあんなにも親切な、そして今日はこれほど敵意に

満ちた彼ら！

突然人が入れ替わったようだ！ ああ、奴らに何が起こき

たんだろう？

そこでおれは自問した。

恐ろしい寒気が人人の上にやってきたのにちがいない！

今こんなにすっかり冷えきってしまうほどに

誰が彼らを打ちのめしたか？

だが、そうであればこそ彼らを助けよ！ すぐにでも！

さなければ君達だって何か、起こりっこないと思っ
ていることが起きるから！

子供殺しの女、マリー・ファラールについて

1

マリー・ファラール、四月生まれの未成年。これとい
つて特徴のない、せむしの孤児。これまで表向きには品行
方正、は次のようなやり方で一人の子供を殺したとい
う。

彼女は言う、彼女がもう二か月の時、
地下室に住むある女のところへ、

二本の注射で胎児をおろそうとしたが、
申立てでは、痛くてうまく行かなかったと。

しかし皆さん、おこらないで下さい。

生きる者すべてみんなの助けが必要なのです。

2

けれども、と彼女は言う、して貰ったことにはすぐに金
を払いました。それから腹をしめつけ、粉にひいた胡椒
を入れて強い酒も飲みました。

だけでも激しい下痢ばかり。

彼女の腹は見る見るふくれて、激しい痛み、屢々皿洗
いの時などに。

彼女自身が、と彼女は言う、当時まだおとなになってい
なかった。

マリア様にお祈りをし、多くの願をかけた。

皆さんもまた、どうかおこらないで下さい。

生きる者すべてみんなの助けが必要なのです。

3

しかしその祈りも、見たところ、何の役にもたたなかつ
たようだ。

あまりに無理な願いであった。腹がだんだん大きくなる

と、早朝のミサで目まいを起こし、祭壇の前ではしょっちゅう冷汗でびっしょり。

だが彼女は出産の日まで、置かれた立場を隠し続けた。誰もおそらく、まったく魅力のない彼女が誘惑に落ちようとは思わなかったから。

そして皆さん、どうかおこらないで下さい。
生きる者すべてみんなの助けが必要なのです。

4

その日、と彼女は言う、朝早く

階段の拭き掃除の際、腹に爪を立てたよう。

からだが震えました。

けれども痛みをもらさぬようにうまくやりました。

一日中、洗濯物を干すなどしていて、不安で頭は碎けないばかり。

それから彼女は産まなければならないことを悟り、同時に胸が苦しくなり。遅くなってやっと自分の部屋へ上って行った。

だが皆さん、お願いです。おこらないで下さい。
生きる者すべてみんなの助けが必要なのです。

5

寝た時に、もう一度用事に呼ばれた。

雪が降っていて、掃除をしなければならなかった。十一時まで。長い一日だった。

夜なかになってやっと落ちついて出産することができ、

そして彼女が言うには、産んだのは一人の男の子でした。

その息子は、ほかの息子達とちがいませんでした。

だが、彼女はほかの母たちと同じではなかった、――

しかし私が彼女を嘲う理由はまったくない。

皆さんもまた、どうかおこらないで下さい。

生きる者すべてみんなの助けが必要なのです。

6

ではこの息子はとうなったか

彼女にその先を語らせよう

（そのことで、と彼女は言う、何も隠そうとは思いません）

そうさせることで、私が何であり、君が何であるかもわかってくる。

ベッドに入ると、と彼女は言う、

まもなく強い吐き気に襲われて、独り、

何が起きるかもわからずに

叫び声をあげまいとじっと我慢しておりました。

そして皆さん、どうかおこらないで下さい。

生きる者すべてみんなの助けが必要なのです。

7

最後の力を振り絞って、と彼女は言う。

その時、彼女の部屋も氷のように冷たかったから、便所まで這いずってゆき、そこで（何時だかもうわからないけれど）いとも簡単に分娩しました。そう、明けがた近く。

今はもう何もかもわからなくなり、と彼女は言う、それ

に半分はこごえていて、子供をかかえていることもできませんでした。というのは女中用の便所には、雪が舞いこむこともあるのです。

そして皆さん、お願いです、おこらないで下さい。

生きる者すべてみんなの助けが必要なのです。

8

それから部屋と便所の間で——それまでは、と彼女は言う、まだ何も起こらなかったのに——子供が声をあげ始め、それがわたしをおびえさせ、と彼女は言う、両の拳でむちゃくちゃに打ち、子供が静かになるまでやめませんでした。

その先、夜が明けるまでずっとベッドの中で死者の添寝をし、

朝になって洗濯小屋の中に隠しました。

だが皆さん、お願いです、おこらないで下さい。

生きる者すべてみんなの助けが必要です。